

塩釜校地に理工学部待望の 研究実験棟Ⅱが3月完成



ほぼ完成した研究実験棟Ⅱの全景。
4号館南の塩釜校地に誕生します。(2月25日撮影)

上)ガラス張りを多用した正面には「学生」「教職員」「卒業生」の連携を表す
3連アーチのデザインが施されています。(1月17日工事中の建物内から撮影)
下)エントランスイメージ図

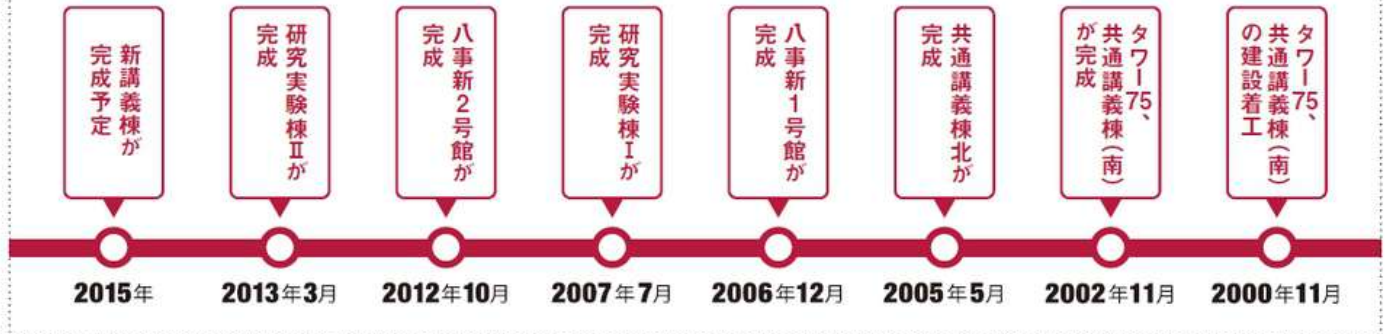


名城大学のキャンパス再開発計画がダイナミックに進められています。教育・研究環境の充実、高度情報化社会への対応、学生の福利・厚生の実現等を目指し、2012年10月に八事キャンパスに新2号館が完成したのに続いて、2013年3月には天白キャンパスに研究実験棟Ⅱが完成します。農学部が主に利用する研究実験棟Ⅰ(2007年完成)に続いて誕生する研究実験棟Ⅱは主に理工学部が使用する待望の新たな研究拠点。天白キャンパス再開発計画は今後、新講義棟建設に移って行くことになります。

キャンパスの新しい玄関口に

2011年6月から工事が行われてきた研究実験棟Ⅱは4号館南の塩釜校地に誕生します。地上4階、地下1階で延べ床面積1万9980㎡、建築面積5957㎡。地下鉄塩釜口から国道153号線を八事方面に向かって歩き、ほどなくして右折すると、目前に真新しい建物と向き合うこととなります。外壁は天白キャンパスとしての統一感を持たせるため、タワー75と同じ茶色のレンガタイプ。正面上の壁面には「MEIJO UNIVERSITY」の校名ロゴが掲げられ、名城大学の新たな玄関口であることをアピールしています。ガラス張りを多用した正面入り口には、名城大学の建物の新たなシンボルである「学生」「教職員」「卒業生」の連携を表す3連アーチのデザインも、吹き抜け構造の建物内部は明るく開放的で、1階には多くの学生が集うスペースが広がっています。

キャンパスの再開発計画



研究実験棟IIが3月完成



2012年
4月17日



2012年
7月10日



2012年
10月4日



2012年
11月7日



2013年
1月29日

研究実験棟II 建設工事の推移

4号館中心に6学科の研究拠点に

研究実験棟IIは、高さ20mの低層構造ですが、各フロアは、中央の吹き抜け空間を囲む形で、研究室や学生実験室などが配置されています。冷暖房システムは、地下を利用した、夏は涼しく、冬は暖かい空気が取り込めるクールビッド、ヒートビッド方式で省エネ化が図られます。屋上には30kWの太陽光発電装置が設置でき、将来的には照明など一部電源を独自で賄うことができるよう計画しています。竣工は3月21日の予定で、4月からは教養教育での物理、化学、

地学系の学生実験室、主に4号館から移転する材料機能工学科(二部)、環境創造学科、建築学科、社会基盤デザイン工学科(2013年度から建設システム工学科をリニューアル)、そして新設の応用化学科、メカトロニクス工学科(二部)を含む6学科の研究室・実験室等が動き出します。また、アプローチ通路沿いにはコンビニ、軽食コーナーが設けられ、実験や授業に追われる学生たちにとっては心強い味方になりそうです。

近隣住宅との調和にも配慮

部屋の広さは25㎡の教員研究室と50㎡の研究実験演習室が標準的な広さとなります。研究実験棟IIの特色について、施設部の山崎信明事務部長は「キャンパス入り口に誕生する建物ですので、名城大学にとっては新たな顔になります。顔にふさわしく、二方面では近隣の環境にも威圧感なく溶け込めるようデザインし、エコ環境にも最大限の配慮をしました」と話しています。

2015年には新講義棟も完成へ

理工学部の中村校舎(名古屋市中村区)から太白キャンパスへの移転は1967年(昭和42年)の2号館、3号館、6号館、7号館の完成に伴い始まり、太白キャンパスには前年、1号館が完成し、法商学部、教職課程部、短期大学部(いずれも当時)が駒方校舎(同市昭和区)から移転しており、理工学部の移転はこれに次ぐものでした。1968年(同43年)には4号館が完成したほか、5号館も完成し、農学部も鷹来校舎(春日井市)から太白キャンパスに合流しました。

太白キャンパスにはこのように、昭和40年代に建てられた建物が目立ちます。しかし、文系学部が入っていた1号館はすでに解体され、共通講義棟北に生まれ変わりました。農学部も主に研究実験棟Iに拠点を構えています。こうした中で、2・3・4号館を主に使用する理工学部では、研究実験棟IIの建設が待たれていました。

昭和40年代～60年代
太白キャンパスの形成過程



大型重量実験棟も誕生

研究実験棟IIには学科共用の大型重量実験棟も誕生します。4号館の構造耐震実験など、大型機材を使う実験ができる実験棟です。研究実験棟IIの研究室等に騒音・振動が伝わらないよう、同じ敷地ながら大型重量実験棟は別棟になっています。文部科学省の私立大学戦略研究基盤形成支援事業に採択されている「21世紀型自然災害のリスク軽減に関するプロジェクト」の実験拠点ともな

り、洪水や土石流対策など水理実験や地盤防災実験も行われます。4号館の実験室は、柱によって導入機材が制限される鉄骨鉄筋コンクリート造りでしたが、大型重量実験棟は柱のない鉄骨造り。広い空間を確保したことにより、大型実験機器を持ち込んださまざまな実験に対応でき、名古屋地区でもトップレベルの実験施設となります。

現在(2013年)
研究実験棟IIの完成で
広がる太白キャンパス



研究実験棟IIが3月完成



新研究棟完成とともに学部長をパトタッチする安藤理工学部長

「新研究棟での新たな発見ドラマに期待」
3月で任期満了の安藤理工学部長
理工学部の安藤義則学部長は、研究実験棟IIが完成する3月で、学部長としての任期を終え、2014年3月には72歳の定年を迎えます。研究室のあった4号館は、飯島澄男教授のカーボンナノチューブ発見につながるフラーレン作製に取り組んだ思い出の詰まった建物です。4月からは飯島教授とともに、研究実験棟IIの2階に研究室を移しますが、「私は名城大学の教員になって定年を迎える来年でちょうど40年。一時期を除く大半が4号館での研究生活でした。学部長として、新研究棟の完成、新学科の開設の仕事にも関わらせていただきましたが、新研究棟から、新たな発見のドラマが次々と生まれてくることを期待しています」と話しています。